

実学にて人を育て、

面白きこの世を生きる

『あちい…あちい…。うだるような暑さ…やっぱり温暖化の影響が大きなか…。いやいや、暑いと思うから暑さも倍増するんだから、夏は暑くて当たり前やる。暑いと思わなくても、暑いものは暑い。』暑いからもう少し涼しくなあれ」なんて、何百回呪文の様に唱えても、夏は蚊に睡眠を妨げられ、そして何も変わらずやっぱり暑い。こういう時こそ平常心、平常心。日々の暮らしの至る部分に仏様の心が宿っているはずだ。それを日常から感じ取れる様にならなきゃ、まだまだ1人前じゃないよな。夏はセミが鳴いて、蚊には血を吸われ、汗ダクダクになりながら、走り回る。そんな事を一々感じられるなんて素晴らしいじゃないか。そんな些細なことの中に、自分の命の尊さを感じられたら…。『そんな事を思いながら過ごす今日この頃ですが、皆さんはいかがお過ごしですか？』

人間って我が儘ですね。自分がそうだから、恐らく皆さんも同じでしょ(笑)。そして世の中は「無常」です。無常だから昨日咲いた綺麗な花も散っていくけれど、無常だからこそ赤ん坊も大きくなっていくのしょう。『無常』には「はかなさ」と「成長」と、両方の意味が含まれている事を私達は知らなければいけません。

よく『あの手この手』と言いますけど、人間には一本しか手はありません。自分に与えられた条件を生かしてやっていくしかないのです。そうやって至誠を尽くしていけば、必ず見えなかったものが見えてくるはずですよ。

さあ今月は、歴史上の人物を数人ピックアップして、私達に勇気をくれるエピソードと格言をご紹介しますと思います(敢えて宗教者を除いて人選しています)。

生涯熱い思いを抱き続け、人生を完全燃焼した人物と言えば、明治維新の「高杉晋作」もその1人です。

明治維新を目前にした慶応3年4月14日、晋作は29才の若さで息を引き取りました。その前日、死の床にあった晋作は見舞客に筆と紙を持ってきてほしいと頼みます。晋作はせいぜい

と苦しうに息をしながら「面白き事も無き世を面白く」としたためました。しかし体力が尽きて後が書けない。晋作は布団で仰向けに寝ながら「野村のばあさんを」と野村望東尼呼びます。彼女は勤王の志士をかくまった尼僧で、女流歌人でもありました。彼女は「この言葉の後を作ってくれ」という晋作の求めに応じて、しばし考えた後、すらすらと「すみなすものは心なりけり」と続け、これを見た晋作は「面白いのう」と言って、そのまま息絶えたと伝えられています。この話の真偽は分からないが、晋作は短い生涯の中で吉田松陰の松下村塾に学び、後の徴兵制の母体ともなった奇兵隊を組織し、農民や町民達の意識を目覚めさせました。それはやがて長州藩全体、そして日本全体をも動かしていきます。私生活の面でも妻と妾を一緒に住まわせたりするといつとんでもない事までして、限られた短い人生を最高に燃焼させ、思い通りに面白く生きた、一人だと思います。短命だったとはいえ、それだけに面白い一生を過ごした彼が「面白き事も無き世を面白く」と発言した事が何だか深いなあ〜と思います。

次は「後藤新平」です。彼は関東大震災後の復興プランを手がけ、現在の東京の都市デザインの原型を作った人物です。彼の格言は「金を残して死ぬ者は下。仕事を残して死ぬ者は中。人を残して死ぬ者は上だ」と。新平はもともと名医と言われた医師で、岐阜で暴漢に襲われた板垣退助が長生きする事ができた要因をつくる初期治療にあたったのが、若き日の医師・後藤新平でした。そんな彼が医師を辞めた後、政治家に転向します。そこでも問題が起こると社会を生物の体に見立てて「病気にならないような予防措置を講ずるのが先ず大事だが、万一病気になるってしまったら、患部を徹底的に治療し、その上で他の臓器とのつながりに目を配って、うまく機能させるような措置をとれば身体は回復する。世の中の仕組みもこれと同じだ」という、医師出身者ならではの独自の視点で、震災で焼け野原になった東京の復興に尽力しました。

この時の区画が今の東京の姿の原型なのです。

次は、幕末の日本を動かした勝海

舟や坂本龍馬ら維新の志士達を思う時、私は「生きた学問でない」と意味がない」との思いを強くします。例えば坂本龍馬は28才で土佐を脱藩し上京した頃、「これからの世の中で、あなたが一番大切なものは何ですか？」と聞かれ自分の「刀」を指さします。後に海援隊を率いて勝海舟と活動を共にした時、同じ質問に「ピストル（拳銃）」、更に暗殺される少し前は「国際法」と答えたと言います。その時々で最も大切なものは、自分が置かれた立場によって変わっていく。言葉は変わるけども、龍馬の生き方そのものは変わっていません。彼がその場その場を一所懸命生きていくがゆえの変化だと思いません。そんな彼の骨格を作ったのが「実学」だったのです。

学んだ教えを理論のためだけの教えに終わらせない。理論のためだけの論理、教室のためだけの学問に終わらせない。それらを自分の血肉にしていって。それができた人達が言葉によって自らを潤し、鼓舞し、その時々状況に柔軟に対応したからこそ、現代でも語られるリーダーになれたのでしょう。

最後に、『青春』というサミュエル・ウルマンがつくった詩をご紹介します。

『青春とは「夢があること」「その実現のために情熱を燃やしていること」であり、決して年齢ではないのである』と…。『青春』とは若い10代・20代の事を言うのではなく、そこに夢と情熱が注ぎ込まれるならば、その時その場が、人生の『青春』真っ只中となるのです。

以上4人の格言をご紹介させて頂きました。私達も人生という『無常』の風に流されることなく、この真夏の暑さに負けないくらいの熱い思いを、「実学」という形で「面白いこの世」に変え、私の人生いつでも「青春」という日々を、邁進してまいりたいものです。

台掌 谷川寛敬

